九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

魔術師との対話 : ブルトン『ナジャ』をめぐって

飯田, 伸二

https://doi.org/10.15017/8782

出版情報：Stella. 22, pp.101-113, 2003-12-26. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

魔術師との対話

――ブルトン『ナジャ』をめぐって――

飯　田　伸　二

ナジャとは誰か。なぜ「私」は彼女にあのように強くひかれたのか。これらの問いはすでに論じつくされた観がある。従来その答として，ナジャが漂わせる神秘性，彼女が垣間見せる予知能力，彼女の肉体的魅力などが引き合いに出されることが多かった[1)]。

こうした議論を十分にふまえながらも，本稿はナジャのコミュニケーション能力――対話の場で対話者を発話へと駆り立てる潜在的な熱望に言葉を与えることで，それを可視化させる能力――に注目し，ナジャの人物像に新たな可能性を探ることを意図している。

1．視点の設定

ナジャと「私」の関係を時間の流れとともに概観すると，前者は物質的な面で後者にますます依存していくのは明白である。この事実を根拠にして，物心両面で「私」に完全に依存するナジャと，愛の欠如から彼女を狂気から救えなかった「私」という構図に依って作品を論ずる『ナジャ』論も散見する[2)]。たしかに，ふたりが出会った翌々日，自ら「唇をさしだす」のはナジャのほうである。しかもその際に彼女が語るのは，「彼女の上に及んでいる私の力」，「私が望んでいる通りのことを，いやたぶん私が望んでいると思う以上のことを彼女に考えさせ，行わせてしまう私の能力」[693] である[3)]。また，サン＝ジェルマンで一夜を共にした後，「私」は「彼女は〔…〕言葉のあらゆる効力において，私を一個の神と思い，私を一個の太陽であると信じることがあった」[714] と回想している。なるほど，彼らの関係を〈外〉側から見る限りにおいては，こうした読みも一定の説得力を持つだろう。第１次世界大戦後の文化シーンを代

表する前衛文学の旗手である「私」と，生活苦に苛まれ，金のためには数人の情夫を持ち，麻薬の密輸さえ厭わないナジャとのあいだには，社会的には決して解消できない溝がある。だが，ふたりの対話を中心にテクストの運動を仔細に追うと，そこには物質的な依存関係や恋愛とは〈違う何か〉がたち現れてくるのが窺えよう。なぜならば，互いの言葉のやりとりが強烈な磁場を形成しているからである。

このように視点の設定次第で両者の関係は大きく変貌する。そのことを象徴する事例として，第1部の最期からふたつ目の断片があげられる。これは「ナジャの舞台への登場」[682] を準備する一連の断片群を締めくくるものであり，内容はルイ・アラゴンが「私」に示したとあるホテルの看板のエピソードと，その「1，2時間あと」で「手袋の婦人」と呼ばれる某女性が彼らに見せた「一幅の変わり絵」のエピソードからなる。まずホテルの看板だが，それには赤い文字で「MAISON ROUGE」と記されているものの，「文字の形と配置のために」，ある角度から眺めると「MAISON の部分が消え去り，ROUGE が POLICE と読める」のだ。いっぽう，変わり絵とは実際には古い彫り物で，正面からは「虎の絵」に見えるが，「表面に垂直の溝が幾本も走って」いるせいで「左へ2，3歩寄るだけで壷の絵に変わり，右へ2，3歩寄るだけで天使の絵に変わる」[680-681] のである。これらふたつのエピソードは，ナジャと「私」の精神状態やふたりの関係についての解釈が，微妙な視点の変化によってであっても著しく変わりうることを示唆している。この断片が「ナジャの舞台への登場」直前に置かれているのも，「私」とナジャの関係が視点の変化に応じてさまざまに理解・解釈できることを暗示するための作為であろう。

こうしたテクスト自身の示唆を踏まえれば，「ナジャは魔術師である」[4]ことを自明の前提として受け入れるのではなく，いかなる視線・言葉の交換のもとで「私」の眼に彼女が「魔女」として映るのかを問うことも，新たな読解への糸口となりうるであろう。ふたりが最初に出会った10月4日のテクストを子細に検討するならば，「私」がナジャに対して大きな関心を抱き，彼女の影響を深くこうむるようになった主因は，ナジャの並外れた〈知性〉ではないかと考えられる。予め私たちの読解を仮説として提示しておくと，彼女は「私」が発する言葉が秘める意義・重要性を鋭く把握し，そこに込められた「私」自身の熱望を察知し，さらに，それをより力強い言葉にして「私」に投げ返す術を心

得ている。こうした言葉の力こそが，「私」にとってのナジャの特権的な関係を決定づける要素ではないのだろうか。

2．対話者ナジャ

10 月 4 日の「まったく何もすることのない，ひどくうっとうしい午後」，ふたりは偶然にすれ違う。言葉を交わす以前に，ナジャがパリの通りで「私」をひきつけたのは，他の通行人とは根本的に違う〈何か〉を彼女が持っているからである――

> とつぜん〔…〕反対方向からひとりの若い女がやってくるのが見える。〔…〕彼女はほかの通行人とは反対に，顔を高くあげて歩いている。〔…〕何か目に見えない微笑が，たぶんその顔の上をさまよっている。奇妙な化粧をしていて，〔…〕目のふちだけが金髪の女にしては黒すぎるほど黒い。〔…〕私はいまだかつてこんな眼を見たことがなかった。[683-685]

そして，ふたりのあいだで視線が交わり言葉が交わされるや，彼女はまさしくひとつの「謎」として出現する――

> 〔…〕彼女はほほえむ，しかしそれはいとも神秘的だ〔…〕。私はもっとよく彼女を見つめる。この眼のなかをよぎるこんなにも異常なものはいったい何なのだろう？ この眼のなかで同時に，悲嘆をくろぐろと映し出し，倨傲を輝かしく映し出しているものは，いったい何なのだろう。彼女が打ち明けてくれる話の発端もやはり謎である。[685]

ナジャの言動は，彼女に「神秘」「謎」を見いだす「私」とは対照的である。声をかけてきた「私」に，彼女は「事情は分かっている」という「微笑」を送り返す[5]。しかも最初の出会いから彼女自身は「私」に「信頼をよせ」，かつての恋人の話，両親の話をざっくばらんにくり広げる。ナジャは「私」の前にひとつの透明性として出現しようとするが，そのためにかえって逆に「私」にとっての謎・神秘が強化されるという事態は，ふたりの関係を根本的に特徴づける構図である[6]。

第 2 部の大半は彼女の言動を記録した〈観察〉と，「私」が彼女に抱く気持ちを書き留めた〈自己観察〉からなる。だが最初に出会った日のテクストだけ

は，「私」が話し，ナジャが聞くという構図が鮮明に読みとれる点において発話行為論的に異彩を放っている。しかも「私」の生の台詞をしめす引用記号と，「ナジャは私の言葉に耳を傾ける」という注記が，話す立場の「私」と聞く立場のナジャの対比を周到に強調している。

まず，自らの身の上話でナジャがアルザス＝ロレーヌに触れたさい，「私」は「かなりはげしく反発」する。次に彼女が仕事帰りの人々を話題にして「善良な人たちがいるものだわ」と呟くや，「私」は「興奮し」「腹をたて」，自由と反抗について演説めいた長広舌をくり広げる――

> とんでもない，問題はそんなことじゃありません。その人たちが労働に忍従しているかぎり，面白い人間ではありえないのです〔…〕。僕はやたらに褒めそやされているあの隷従というものを力の限り憎んでいます。隷従を強いられて，大抵はそこから逃れられない人間を哀れとは思っても，僕がその味方をするのは，人間の労働の厳しさのためではなく，人間の抗議のはげしさのため，まさしくそのためでしかありえないでしょう。〔…〕自由とは永遠に続く解放です。そうあるべきでしょう。とにかくそんな解放が可能であるためには，たえず可能であるためには，〔…〕僕らは鎖に押しつぶされてはいけないのです。[687]

演説を聞き終わったあとで，ナジャは「私」には「妻」がいることを知る。最初は「結婚してらっしゃるの。あら，それじゃ……」と残念な素振りを見せながら，「ひどく深刻で，考えこんだ口調」で以下のように語る――

> 残念ね。でも……あの立派な考えは？ 先ほどの私にはとてもよくそれが見え始めていたのに。それは本当にひとつの星，あなたがそれに向かって進んでいるひとつの星でしたわ。あなたは間違いなくその星にたどり着けるはずでした。お話を聞きながら，あなたを引き止めるものは何もないだろうと感じていました。何も，この私でさえも……あなたはあの星を，決して私が見たようには見ることができないでしょう。あなたには分からないんだわ。あの星は中心のない花の中心のようなものだということが。[688]

「私」に対する期待感を表明しながら，ナジャは「私」がめざす自由を「中心のない花の中心」に例えることで，シュルレアリスム運動の本質を射ぬく。シュルレアリスムがめざす自由とは現実にはまだどこにも存在しない。だがその実現にシュルレアリスム運動は自らの創作行為，社会運動を賭けている。そ

れゆえ，シュルレアリスム的自由とは，いまだ存在しないにもかかわらず，いや存在しないが故に，それなしでは運動の意義が全面的に瓦解しかねない〈何か〉なのである。このように，ナジャは「私」の希求する自由の理念，そのダイナミズムを「私」から見事に聞き取っている。相手の言わんとすることを本人以上の鋭さで把握する彼女の能力を前にして，「私は極度に感動する」[7]。

自由にかんする議論につづき，「私」はナジャに「あなたは誰？」と問いかける。「私」にとってこの問いかけが持つ重要性は，「私のほかに問う者はない」「他のあらゆる問いを要約するひとつの問い」というこの質問に添えられた説明からも分かる。それに対しナジャは「私はさまよえる魂」と「ためらうことなく」答える。問いに付された「私」による饒舌なコメントとは対照的に，答えに対する彼の反応についてテクストは完全な沈黙を守っている。このコントラストは「私」が受けた衝撃を強く示唆する。なぜならば，この返答はナジャ本人ばかりでなく，「私」のあり方とも深く関連しているからである。まず，それは彼女の状況を完璧に表している。つまり「さまよえる魂」という表現は「華奢で，歩きながらやっと身を支えている風情」に，彼女の微笑みがかもし出す「神秘」に，そして彼女の話の「謎」に完璧に対応している。同時にこの言葉は，パリやナントを徘徊する「私」，「それ（？）がそこでおこるだろうという不確かな情報」[663] だけを頼りにボンヌ・ヌーヴェル大通り界隈を定期的にさまよい歩く「私」の心のあり方とも奇妙な一致をみせるのである。

さらに別れ際にナジャは，たち去ろうとする「私」をわざわざ引き止め，彼の何に心を引かれたかを述べる。10 月 4 日の記述を締めくくるこの言葉において，またも彼女は並外れた洞察力を示す――

> さらにしばらく彼女は私をひきとめて，私のうちの何が彼女の心を打つのかを言おうとする。それは，私の考え方のなかに，私の言葉づかいのなかに，私の存在の仕方すべてのなかに見られるもの，そしてその点を誉められることこそ生涯をつうじて私の最大の弱みのひとつであったもの，つまり，単純さだというのだ。[689]

最初の出会いでくり広げられる言葉のやりとりにおいて，ナジャは「私」に自らの存在を曝け出し，透明になるべく自分の過去・現在をざっくばらんに語りながら，逆説的にひとつの「謎」となって「私」の知への欲望をくすぐる。同時に彼女は，「私」の話しに耳を傾け，「私」がまさしく希求しているものと，

「私」の本来のあり方を見抜く。つまりナジャは，他者が発する囁きを聞き取り，それに的確な言葉を与える高度なコミュニケーション能力，すなわち〈聞く力〉により，他者の自己認識に不可欠の〈対話者〉として「私」の前にたち現れるのである。

3．取り憑かれる「私」

この最初の出会いがふたりの関係の本質を決定づける。「私」自身が「彼女を愛していないのなら，これ以上会いつづけることは許されない」と認めてもなおナジャに会いつづけるのも，また彼女は自身について包み隠さずに話しているのにもかかわらず謎めいた記号のように見えるのも，「私」の語りに耳を傾け「私」の考えに的確な言葉を与える〈対話者〉ナジャの魔術的な〈聞く力〉のためなのである。最初の出会いから 3 日後の（10 月 7 日），ナジャと二度と会えない事態を想定して「私」が漏らす次のような言葉は，ナジャの存在が認識行為といかに深く結びついているのかを示唆するものである――

> 彼女に会わないとしたら，きょうの午後はどうするか？ いや，もうこれっきり会わないとしたら？ そうしたら，私はもう知ることがなくなるだろう。つまり，もう知らないのが当然という身になってしまうだろう。［701］

ナジャの〈対話者〉としての決定的存在感は，ふたりが共に過ごした夜にかんするテクストからも感得できる。初めて出会ってからその夜に至るまでの一週間あまりの日々（「この死にもの狂いの追跡」）を振り返りながら「私」は，ふたりがもっとも強烈な精神の高揚を味わったのは対話をつうじてであることを改めて確認する――

> あの不可思議な麻痺状態が与えてくれた短い折々に，ふたりながら決定的に地上からあれほど遠くへと投げ出されてしまった私たちが，それでもいまだ煙をあげてくすぶっている古ぼけた思想や綿々と続く生活の残骸の上で，信じがたいまでに一致した考えをたまたま交わすことができたというのは，一体どういうわけなのだろうか。［714］

「私」のことを誰よりも理解する特別な〈知〉をもつ存在，そういったナジャ

のイメージは当夜の出来事を仄めかす表現にも色濃く反映している――

> 私はまた――あの瞬間，あれほど美しくまた悲劇的なことはなにひとつありえなかった――彼女にとって私が，スフィンクスの足もとで雷にうたれた男のように，黒い冷たい存在になっていたことを思い出す。[714]

「スフィンクス」とその「雷にうたれた〔…〕黒い冷たい存在」との対比には，当然のことながら，この夜の性的な出来事への暗示が見てとれる。だが同時に，ナジャをスフィンクスに喩えることは，彼女を自己理解への導き手と位置づけようとするテクストの運動に呼応している。

最初の出会いで「私」はナジャの〈聞く力〉に驚愕した。そのいっぽうで彼女は，早くもその翌日から時折独り言を口走り，「私の言葉にまったく耳を貸さなく」[719] なる予兆をみせる。そんなナジャとは対照的に「私」は，「彼女を観察しすぎる」[701] ことを自己批判するほど，彼女の言動に注意を払う。なぜなら絶対的な〈対話者〉としてナジャが「私」の根幹に触れた以上，彼女のたち振る舞いは「私」の精神状態を大きく左右することになるからだ。ナジャからは「神」「太陽」に喩えられながらも，そのじつ，彼女の絶対的な影響下に置かれているのは「私」のほうなのである。こうした事情が最も明確に読み取れるのは 10 月 7 日の記述であろう。この日の朝，前夜の出来事――ナジャと交わした初めてのキスや深夜のパリでのふたりしての徘徊――がもたらす「感動」に耽りながら，「私」は彼女にたまらなく会いたくなり，今日会う約束をしなかったことを無性に悔やみながら，「妻ともうひとりの女友達」をつれて出かける――

> タクシーのなかで私たちは，昼食のあいだもそうだったように，ナジャのことを話しつづける。すると突然，通行人にはまったく注意を向けていなかったのに，サン＝ジェルマン通りに入るところで，何かしら素早いしみのようなものが，あそこだ，あの左の歩道をかすめてゆき，私はほとんど機械的に，車の仕切り窓をたたいてしまう。まるでナジャがいまそこを通り過ぎたかのようだ。私は，彼女が向かった可能性のある三方向のひとつを行き当りばったりに選んで，走ってゆく。やはり，彼女だ，いま立ち止まって，さっきも一緒だったらしい男と話している。そう手間取らずに別れると，私のほうにやってくる。カフェに入ったが，話がうまく切り出せない。これで二日も続けて，偶然に出会ったのだ。彼女が私の思いのままになっているのは明らかだ。[701-702]

ここでの「私」の言動には，ナジャの「独り言」と同じく常軌を逸したものがある。第2部の最後で「私」は，彼女に狂気の烙印を押した当時の精神医学を激しく攻撃し，「非狂気と狂気との境界の不在」を主張する。じじつ，「私」自身もナジャの存在感に圧倒されて，時には普通とは思えない言動に走るだけに，この主張はいっそう説得力をもつ。たとえばこの引用箇所では「私」は場所はおろか，妻やその友人の都合もわきまえず，ひたすらナジャのことを語りつづける。タクシーに乗ればナジャらしい人影を追い求め，それらしき姿を見かけるや，翌日に会う約束をしていたにもかかわらず，ふたりの女性を残したまま必死に人影を追いかける。こうした言動をみるならば，「私」がナジャに文字どおり取り憑かれたことを認めないのは困難である。しかも自分自身の常軌を逸した行動から「私」が引き出す結論は，2日にわたる偶然を理由にナジャが自分の「思いのままになっている」というものである。現実にはその正反対であろうとも，もはや「私」はそのことに気付く省察力，冷静ささえ失っているのだ[8)]。

ナジャに取り憑かれてしまった以上，彼女との訣別はもはや「私」の主体的な意志・決心では実行に移せない。たしかに，ふたりが夜を共にした翌日，「私」はナジャの過去を聞き，その無防備さ，自堕落ぶりに絶望したあげく，遂に彼女とは二度と会わない決心をする。そしてナジャ自身もこの決断を尊重する――

> ナジャとはもう二度と会ってはならないだろう，いや，もう二度と会うことはできないだろう，という思いに私は泣いた。〔…〕そう私がいったとき，彼女はなんとも感動的な態度をとった。私のいだいた決意をそぐようなことは少しもしないばかりか，反対に涙のなかで力をふりしぼり，その決意をつらぬくように私をはげますのだった。〔…〕別れが決定的に不可能になるかどうか，それは私ひとりにかかっていたのである。[718]

しかしナジャの同意にもかかわらず，「私」は「その後も何度か」彼女と会いつづける。対話をつうじてナジャは「私」の存在に不可欠の部分となった以上，彼女の話しにどれほど「いらいら」「退屈」[710] しようが，「独り言についてゆくのがつらく」[713] なろうが，あるいは互いに「理解しあえない」と感じようが，「絶望して〔…〕逃げ出し」[735] たくなろうが，「私」の主体的判断は

あまりにも無力なのである。結局，決定的なふたりの別れが実現するのは，逗留先のホテルでの「常軌を逸した振る舞い」のためにナジャが「ヴォーキュルーズの精神病院」に収監された後のことである。

だが，それでも「私」がナジャの影響から容易に抜け出せるわけではない。なぜなら，そもそも，『ナジャ』というテクストの執筆自体が次のようなナジャの欲望に命令されたものだからだ――「アンドレ？ アンドレ？……あなたはあたしのことを小説に書くわ」[707-708]。しかも，執筆の運動を強く動機付けている「私とは誰か」という問いかけ自体が，ナジャが「私」に，そして「自身」に投げかけた唯一ともいえる問いの反復・変奏にほかならないのである――「あたしは誰だったのかしら？ 何世紀も前のこと。あなたはあのころ誰だったの？」[697]。

4．新しい物語

「私とは誰か」。問いの答えは，「私」と他者が取り結ぶ関係の網の目を解析することによってしか導き出せない。しかも，網の目の布置が変動する度に答えは揺らぐ。けっして決定的な回答のない問いなのである。ナジャが残したこの堂々回りの問いからいかにしたら自由になれるのか。テクストはかかる問題にきわめて明解な答えをもたらす。つまり，深刻なアイデンティティーの危機に囚われていた「私」は，「自分とは誰か」という〈閉じた〉問題系から，美の予言的な定義（「美とは痙攣的であろう。さもなければ存在しないだろう」[753]）という〈開かれた〉問題系へと，位相を超えた跳躍を果たすのである。本稿を終えるに前に，この点に簡単に触れておきたい[9]。

ナジャが残した問いに決定的な答えは準備できない。ならば，それから自由になるには，問いがその妥当性を失うような状況に自らをおくしかないであろう。すなわち，ナジャとは違う〈名〉の下に自らの欲望を再編成し，新たな物語を生きること――

> この物語の中断される 8 月末の日付から，12 月末の日付，つまり〔…〕この物語が私からはなれていってしまう日付のあいだ，この物語の保っていた最良の希望の数々によって，さらにまた，〔…〕それらの希望の実現そのもの，全面的な実現，そう，本

当とも思えないようなその実現によって，私はどうにかこうにか〔…〕生きてきた〔…〕。そのあいだにナジャは，ナジャそのひとはあんなに遠のいてしまったけれども……〔…〕そして，この本の最初のページから最後のページまで，少なくとも変わることのない信頼を私が抱きつづけるはずの〈驚異〉，まさにあの〈驚異〉によってもたらされ，そしてすでにとりもどされているもの，もはや彼女のではないひとつの名前が，私の耳にいまも響いている。[746]

「私」に新しい物語を生きることを可能にする「彼女〔＝ナジャ〕のではないひとつの名前」について，テクストは何も語っていない[10)]。この人物は終始「君」と呼ばれつづけるからである。しかもナジャにかんしては，その服装，歩き方，体つき，化粧などのかなり詳細な描写が頻繁にくり返されるのとは対照的に，「君」の容姿を具体的に描くいかなる記述も見られない。だが，具体的描写の完全な欠如にもかかわらず，「君」はその確固とした存在感で「私」を新しい物語の世界に定着させる――

君は私に耳を傾けるすべての人にとって，本質などではなく，ひとりの女であるはずだ。〔…〕君の理性は，私にとっては非理性と紙一重になることなく光り輝く〔…〕。君はすべてが夜明けへと連れ戻す存在〔…〕。

わざとそうしているわけでもないのに，君は私のいちばん親しかったものたちの姿にも，私の予感のさまざまな像にもとってかわった。ナジャはそんな像のひとつだったが，君はそれを私から隠したのはこの上なく素晴らしいことだ。

私の知っている限り，この人格の置き換えは君の所でとまってしまう。なぜなら，君に置き換わることのできるものは何もないからであり，私にとってこの一連の謎は，はるか昔から，君の前で終わることになっていたのである。

君は私にとっては謎でない。

私のいうのは，君が私を永久に謎から遠ざけてしまうということだ。

君は君だけが存在できるかのようにして存在している〔…〕。[751-752]

ナジャのイメージとの周到な対比（狂気／理性，ひとりの女／妖精，夜明け／夜）のもとに構築されたこのテクストは[11)]，ナジャのイメージを隠す存在として，つまりナジャが体現していた「謎」から「私」を「永遠に遠ざける存在」として「君」を位置づける。「君」についての具体的描写がほぼ完全に欠落した背景には，おそらくこの「謎」の不在があるのではないか。「君」が「理想的＝観念的に美しい」ばかりでなく，「私」自身が彼女の視線・欲望の特権的な対象であることに「私」は寸分の疑いも抱いていない。だからこそ「私」の目

には彼女の身振りや言葉のすべてが自明のものとして，すなわち描写や説明が不要のものとして映るのである。ナジャと「私」は言葉・視線のやりとりが絶えることのない〈コミュニケーションの世界〉から抜け出せないのに対し，「私」と「君」のほうは，この〈欲望の自明性〉により「沈黙の王国」[753] に住まうことができるのである。

結　　語

従来の『ナジャ』研究では，神秘・謎・運命・予知能力といった言葉を中心にヒロイン像が記述・分析されるのが一般的であった。本稿はこうした視点を修正すべく，コミュニケーション能力，とりわけ〈聞く力〉という視点から新たなヒロイン像の構築を試みた。「私」がナジャの存在に圧倒されるのは，何よりも彼女の言葉をつうじて「私」が新たな自分を発見できるからである。「私」が常軌を逸したやり方で彼女を追いかけ，ついには彼女自身を悩ます「私とは誰か」という問いまでをも引き受けるのも，ナジャとの対話が新たな自己認識につながることを「私」が感じ取っていたからなのである。ナジャがシュルレアリスム運動のミューズであったのは，まさしくこうした理由からなのである。

註

1）最近の論考にもこうした読みの傾向は見られる。たとえばフェリニョは，ナジャを「魔女 magicienne」と捉える作者ブルトンの証言をひきながら，「彼女は問いに答えをもたらすのと同じく，疑問を巻き起こす女性である」と述べている（Jean–Louis Ferrignaud, *«Nadja» de Breton. Premières Lecons*, Paris : PUF, coll. «Bibliothèque major», 2002, pp. 56–57）。

2）Roger Navarri, «*Nadja* ou l'écriture malheureuse», *Europe*, n° 528, avril 1973, pp. 187–195.

3）André Breton, *Nadja*, in *Œuvres complètes*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», t. I [1988], pp. 643–753. 以下『ナジャ』のテクストとしてはこの版を使用し，引用はすべて［ ］内に頁数を示した。ただし同一頁が連続する場合は，煩雑になるのを避けるため割愛した。なお訳出に当たっては，巖谷國士訳『ナジャ』（白水Uブックス，1989 年）と同じ訳者による『ナジャ』（岩波文庫，

2003年）を参照した。

4）André Breton, *Entretiens*, Paris : Gallimard, coll. «Idées», 1969, p.141.

5）もちろんこれは客に応対する娼婦の態度と読むことは可能かつ正当である。しかし，言葉を交わす以前に相手に「謎」と「神秘」を見てしまう「私」と，その相手の事情を分かっていると信じるナジャのコントラストは，以後，くり広げられるふたりの関係を読み解くうえで意義深い手掛かりとなる。

6）「ブルトンは彼の束の間の女ともだちを現実から切り離された純粋な記号として作り直すために，彼女の存在からすべての起源を消去した」と述べながら，ナジャがかもしだす謎・神秘性を，作者ブルトンの文学的作為によって説明しようとする論も見られる（塚原史「『ナジャ』の詩と真実」，『アヴァンギャルドの時代――1910-1930年代』所収，未来社，1997年，159頁）。森中高明もナジャの記号性を正面から取り上げている（「贈与と驚異：『ナジャ』論」，鈴木雅雄・真島真一郎編『文化解体の想像力――シュルレアリスムと人類学的思考の近代』所収，人文書院，2000年，365-379頁）。本稿の問題設定は，ナジャは「私」に対して自分のことを包み隠さず話しているにもかかわらず，なぜ「私」には彼女が神秘のベールをまとってしまうのかを問うことにある。

7）最初の出会いの場でナジャが「私」への期待を込めて発する自由に対する知見は，第2部の最後に，ナジャが精神病院に収監された後，「私」が自由にかんして述べる理論的弁明と鮮明なコントラストをなしている。「結局，いつも彼女のものだったあの考えのおかげで，彼女は強かった，しかも弱くなれるだけ弱かった。あの考えを，だが私は彼女のものとしてどこまでも守っていたのだし，他に優先させるための助力をどこまでも惜しまずにいたのだ。それはつまり，自由とは，この世ではもっとも困難な無数の放棄とひきかえに得られるものだとしても，それが与えられているかぎりは無制限に，どんな実利的配慮もなしにそれを享受しなければならないという考えでる。その根拠は，もっとも単純な革命的形態をとるものとして考えられる人間の解放，しかも全面的な，そしてもちろん各人の思いのままの手段による人間の解放こそは，いまも仕えるにふさわしい，唯一の目的だからである」[740-741]。

8）新宮一成が見事に指摘しているように，「私」がナジャおよび自身の言動を合理的に説明する能力を失っていることを示唆するもっとも鮮烈な場面は10月6日の日記に見られる。この日，夜のパリを散策しながら，ナジャは予知能力を発揮する――「ナジャの視線はいま家々をひとめぐりする。「ほらあそこ，あの窓が見える？ あの窓，黒いわね，ほかの窓とおなじで。よく見てるのよ。一分たつと，あかりがつくはず。赤くなるわ」。一分たつ。窓にあかりがつく。はたして，赤いカーテンがある。（これが信じられることの限界をこえているかもしれないというのは，残念だがいたしかたのないことだ。〔…〕）じつをいうと私はここで恐怖におそわれ，その恐怖はまたナジャもとらえはじめる」[695]。だが「〈私〉は，ナジャがいつもこの辺りを通っていて，大体何時ごろにその窓に明かりがつくかを知っているのだろう，といったような合理的な説明を，全く考えることもできなくなっている」（新宮一成

『ラカンの精神分析』，講談社現代新書，1995 年，19–21 頁)。この書物が『ナジャ』に言及した数頁（17–25 頁）に，本稿は多くを負っている。

9）『ナジャ』第 3 部の重要性については以下の論考を参照―― Pierre Testud, «Nadja, ou la métamorphose», *Revue des Sciences Humaines*, t. XXXVI, n° 144, octobre–décembre 1971, pp. 580–589.

10）「君」がテクストに登場する直前に「君」に向けて語られるドゥルイの物語については様々な解釈が行われてきた。しかし，これまでの本稿の議論をふまえれば，ドゥルイ氏の「じつにばかばかしい，じつに陰鬱な，じつに感動的な話」[749] を，「君」と共に新しい物語を生きることによって，ナジャが残した問いを忘れさせ，文字どおり新しい自分を手に入れた「私」の寓話として読むことが可能ではないだろうか。

11）Roger Navarri, *André Breton, «Nadja»*, Paris : PUF, 1986, coll, «Études littéraires», pp. 14–16.